

# あを 4

2017



桜散り  
あなごも  
なごも

秘典



# あそ

四月



東京 佐藤 喜孝

## 雑詠

うすき日をあつめて十月櫻かな  
冬雨に始まるひと日旅と思ふ  
寒梅や刺さるものなり髪は毛は  
さくらんぼのぼはさくらんぼ吸ふ口  
一匹のうごく蠅見て春ひと日

埼玉 秋川 泉

## 待ちわびて春

薄氷の上で鳥の遊びをり  
とぼとぼと帰りの道に冬薔薇  
強風をいなして咲けり水仙花  
初場種勢の里所や雲竜型の土俵入  
秩父山ムツばあさんの花の春



東京

石森 理和

炬燵

日向 夏 蜜 柑 金 柑 虫 眼 鏡  
炬燵から頭を出して上目遣ひ  
おさげ髪目指す事ある大試験  
亀よりも首を縮めて「鬼は外」  
池に氷をさながはしやぐ声響く

山梨

井上 石動

雑詠

オリオンの揺らめき蒼し風の音  
ドア押して暗きの中よ沈丁花  
我が街はみんなおぼろや春の雨  
山に入るひかり残れり遅日かな  
春霞たなびきにけり明日香村

埼玉

大日向幸江

雑詠

陰となり窓を横切る春の鳥  
大雪や十日過ぎても雪掻きを  
床下に住む子狸や嚏せり  
山眠る去年の想ひ抱いたまま  
山寺に和尚と狸それぞれに

千葉

黒澤 佳子

土筆

シクラメン鉢を回せり陽に向けて  
薄氷に好奇心の子そつと触れ  
風邪引きか鼻水啜る齢かな  
満目の土筆あまたや常磐線  
梅探る足取り増すや万歩計



東京 七郎衛門吉保

ラジオ

鬼が前福さきが先かとラジオ夜話  
越後路や糝粉塗して山眠る  
不覚にもバレンタインに顔弛む  
春一番ふなむらとおる船出する  
朝の風呂ラジオのむかふ「春の海」

東京 篠田 純子

虎の門病院

病窓の東京タワー春燈  
リハビリのいっちにいさんし春動く  
インシュリン腹に二単位花菜飯  
春暑し新橋までの銀座線  
大規模工事の仮設の道路かぎろへり

石川 定梶じよう

のどか

夜に入ると音にちからの雪解川  
何の日の国旗立ちけり種物屋  
かほ上げよ金次郎像鳥雲に  
共有する静かな時間蜃気楼  
波がのどか浮木ものどか見てそして

埼玉 須賀 敏子

二月

田雲雀や空堀川に春の水  
良い本に巡り合うた日花菜漬  
春満月きつと良いこと有りさうな  
湯上がりの踵クリーム春浅し  
伊予柑とはるみポンカン届きけり



埼玉

竹内 弘子

半

半醒のまくら許まで木の芽雨  
デパートに半旗めくもの雨水の日  
半跏坐の指の肉付き浅き春  
縄で吊る鮭の半身のほの暗し  
吉日を半ば信じる小鳥の巢

東京

田中 藤穂

初蛙

日本海路の臺ある道つづく  
ぜんまいを柔らかく煮て舅の忌  
初蛙昨日鳴きしが今日鳴かず  
古着買ふの電話うるさし花杏  
アラスカの子持ししゃもを食むあはれ

三重

長崎 桂子

雪

動物園鳥のインフルエンザかな  
生きること禅と説く僧寒の内  
降頻る雪は三日や本に静  
残る雪土と草木は蘇る  
梅一輪心華やぐ一日なり

東京

森 なほ子

朝の道

柴 又 や 団子 艶めく 春灯  
茹卵つるりと剥けて春立てり  
寒明くる少し濡れゐて朝の道  
春一番今朝の迷ひを吹き飛ばし  
梅月夜鳥ねぐらに姦しく



東京

赤座 典子

### 野遊

寒明やパンパンパンと頬はたく  
母の湯呑友のエプロン朧にて  
テーブル拭くジャージに前掛春休  
一才半の大好きな砂春の色  
野遊や初めての靴すぐに脱げ



## 三月作品より

炊飯器に入りっぱなし十二月

佐藤喜孝

師走は殊の外仕事も忙しくなられた作者は、家事も引き受けられて炊飯器に御飯を炊いた。しかし本当に忙しくて食事をとる時間もない。炊き上がった御飯は炊飯器の中にそのままになっている。一段落なさった時にゆっくりお食事をなさった事でしょう。(泉)

刻まずにとんとんと打つ芹薺

赤座典子

人日の節句、「無病息災」を祈り、正月の疲れをとると云い七草粥を食します。菜(セリ・ナスナ・ゴギョウハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ)は、六日の晩に俎板の上で叩きその時「ななくさなずな唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先にストトンス

## 秋川泉・森なほ子・佐藤喜孝

トトン」と云ってはやします。もとは鳥追いの文句であったようです。この中の「仏の座」はシソ科の春、紫色の花をつけるホトケノツツシではなく、早春に黄色い花をつけるキク科のコオニタビラコで七草に若葉を食すとありました。

七草粥はいつまでも母の思い出に通じるなつかしい行事です。(泉)

年賀状逢ふこともなく五十年

秋川 泉

誰もがこんなことがありそうです。無駄な言葉はひとつもなく、共感を呼びます。五十年といえば人生の大部分です。ほのかな思いのあった人かもしれないが、別々の人生を歩み二度と逢うことはなかったのです。過ぎ去った歳月をしみじみ振り返っている作者です。(なほ子)

をさな子の部屋中ぐるぐる大晦日

石森 理和

大晦日、大人は忙しそうに働いているし、なんだかいつもと違う雰囲気、幼いながらなんとなく興奮気味に部屋をぐるぐる回っている。そんな姿を優しい目でここにこに見守っている理和さんです。(なほ子)

年新た湯はこんこんと沸き出る

石森 理和

なんとも大らかな作品である。新年を迎える大人の心映え。この句、羨望の眼をもつて眺めたことである。(喜孝)

如月のずんと富岳や夜が明ける

井上 石動

石動さんは山梨県にお住まいの方です。厳冬の、それも夜明けの富士を目の当たりにされたのです。なんと羨ましい！その迫力を「ずんと」と表現しま

した。白い山肌に巒の一本一本が薄明にくつきりと見えてくるのでしょうか。そんな富士を見てみたいものです。(なほ子)

神々し初日の当たる摩崖仏

王 岩

スリランカ・パキスタン・中国に多い摩崖仏。日本では大分県臼杵や栃木県大谷のものが有名です。私は昔のままの摩崖仏を臼杵で五十年前位に観ました。今のように観光地になつていない静かな村の中に厳かに在りました。作者の「神々し……」の感動はそのまま私の心に響きました。今でも感銘を受け、じつとその場にとどまった事が、ありありと思ひ出されます。(泉)

万両の実の赤々と年暮れる

王 岩

万両の紅を豊かに活けにけり

作者は今、漢詩を学ばれてゐること。わたしもはるか昔独学で漢詩を作らんと意気込んだ時があった。掲句「赤々と」・「豊かに」と述べることにより凡を脱してゐる。漢字の古里では赤と紅の違いをだう捉へてゐるのだろうか。(喜孝)

東京都でありながら異国の小笠原諸島。(一五九三年、小笠原貞頼により発見される。一八七六年日本領となる。第二次大戦後は米国の施政喧嘩に置かれたが、一八六八年返還される。)

東洋のガラパゴスと称されるその島々は、二〇一一年に世界遺産に登録されました。その美しい島に転勤されるとは！作者の感動がそのまま伝わって、心浮き立つ思いがします。(泉)

松の内空に給油のオスプレイ

七郎 齋吉 保

せっかくの春の香りもワンくんには実は悪臭？無理もありません。嗅覚の優れた犬にとってはショックだったことでしょう。思わず顔を背けてしまったのですね。情景を想像すると、笑ってしまいます。でも、人間だつてあの香りに春を感じられる人はどれだけいるのでしょうか。若者や子供、露の臺を食べなれない人など、けっこうマルチーズ並に顔を背けてしまうのかも。(なほ子)

お正月の清々しい気分の中で、突然現れた「オスプレイ」。正月の楽しい明るい心持ちが一挙に掻き消され、この忌々しい現実にも向き合わされました。

作者は今と云う時代を鋭く切り取っています。(泉)

春の転勤何処かと聞けば小笠原

黒澤 佳子

焼き芋の包みの新聞読み耽る

篠田 純子



焼き芋を包むのは古新聞が定番。なぜか真新しい新聞はあまり見ないようです。一体いつ頃の新聞？と思うようなものが生々しさがなくて、焼き芋には似合うような気がします。ふとその見出しに興味をひかれ、つい読み始めてしまう作者。せつかくの熱々が冷めてしまいますよ。(なほ子)

### 団子屋の蒸籠の湯気寒気団

定梶じょう

日本をすつぱりおおう寒気団、その中でももうもうと湯気を上げる団子屋の店先、その湯気の中の団子。寒気と湯気の対比、始めと終わりに置かれた「団」の字、大変技巧的な構成の句と思うのですが、技巧を感じさせず、さらりと自然に読めてしまうのです。たくまざる技巧というのでしょうか？(なほ子)

### 松過ぎて日記一行のみとなり

須賀 敏子

暮れからお正月にかけては一年で一番大きな節目

### 冬の星裕子さん裕子さん呼んでみる 田中藤穂

齊藤裕子さんが、星の世界に旅立たれたのは二〇一六年五月二十三日。たおやかで優しい美しい方でした。今でも私は、まるで天女が羽衣をまとうて天に帰ってしまったような感じが致します。藤穂さんも思わず「裕子さん、裕子さん」とお呼びになったのですね。胸がいつぱいになりました。(泉)

### 初富士に見下ろされぬて子ら遊ぶ 森なほ子

お正月に小さい方々とご家族でお出かけになられたのでしょうか。初富士の美しさと、浜辺でしょうか、小さい方々が楽しいげに遊んでいる光あふれるのどかな景がおもわれました。作者の幸せな笑顔がこぼれます。(泉)

### 日は高き風呂を味はふ松の内 長崎 桂子

の時期です、慌ただしく忙しい暮れ、一夜明ければ新年。主婦にとってはまさに一大行事。お正月は里帰りや帰省の子や孫を迎え、賑やかな毎日。それともんびりとテレビ三昧の寝正月？そんな非日常も松の内まで。過ぎてしまえばまた日常が始まり、日記は一行で足りてしまうのですね・・・誰も味わう気持ちを一日記一行」という言葉で的確にいいとめています。(なほ子)

### 二科展へ急ぐ濃い目のアイシャドウ 竹内 弘子

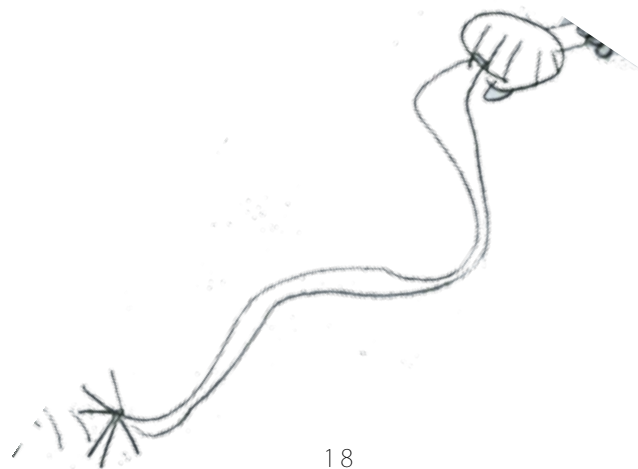
百年の歴史をもつ二科展。(新しい傾向の作家に活躍の場をひらき、多くの芸術家を輩出している。)この華やかな展覧会会場へ急ぐ女性。自らの作品が展示されているのか、受賞なのか、この女性が芸術家なのか。何とも時めきを感じ不思議な魅力ある句と思いました。(泉)

前句と対照的にこちらはまだ松の内です。お正月は特別なハレの期間、それ故、まだ日の高いうちにゆつくりと風呂に使って、普段はしない贅沢を自分に許す作者です、心地よくしみじみとお正月気分を味わっておられます。「味はふ」の語が効いています。(なほ子)

### 一群の来てぬて嬉し初雀 森なほ子 丁寧になたみくる初渚

初春のことほぎの二句。きのふと同じく今日も群になつて雀が来てゐる。餌をあげてゐるのだらうか。来てゐると云ふより、来てくれたといふ思ひだらう。「初」を冠せると生命も改まる。二句目も見慣れた光景であるが、「丁寧にな」といひ「初渚」と云ふと、厳かな気になるからふしぎ。(喜孝)

繪の中を出てゆく道に冬木影	佐藤喜孝
八割が想ひ出の身を初湯かな	赤座典子
屠蘇散や親族の輪に父をみる	秋川 泉
年新た湯はこんこんと沸き出る	石森和子
如月のずんと富岳や夜があける	井上石動
万両の紅を豊かに活けにけり	王 岩
凍滝や地球の果を想ひたる	大日向幸江
春の転勤何処かと聞けば小笠原	黒澤佳子



三歳の児の意気高く初かるた	七郎衛門吉保
池の面を整えてゆく鴨の水脈	篠田純子
あつたかさう誰が失くせし冬帽子	定梶じょう
手袋を脱ぎて賽銭子の権現	須賀敏子
二科展へ急ぐ濃い目のアイシャドウ	竹内弘子
冬の星裕子さん裕子さんと呼んでみる	田中藤穂
日は高き風呂を味はふ松の内	長崎桂子
丁寧な波たたみくる初渚	森なほ子



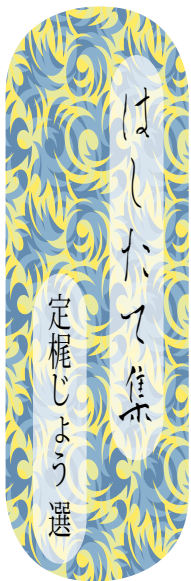
るいま

## 比来披見

ホトトギス 三月号	霞みたる富士は見えねど見てをりし 鉛筆の尖り過ぎたる大試験	稲畑 汀子 稲畑廣太郎
沖 三月号	花甘藍色よく茹でて山に雪	能村 研三
雨月 三月号	神さぶる素戔鳴宮の淑気かな	大橋 暁
槐 三月号	若菜野の賑はつてをり喜寿米寿	高橋 将夫
馬酔木 三月号	水餅の水の重さや朝日差す	徳田千鶴子
風土 三月号	ひりひりと月のひかりの冬ざくら	南 うみを
京鹿子 三月号	探梅や空の結び目解いてやる	鈴鹿 呂仁
六花 三月号	菜箸に寒のもろこのあぶらかな	山田 六甲
万象 三月号	甘露煮は今年も上州子持鮎 灰神楽立てて初市果つるかな	大坪 景章 内海 良太
春燈 三月号	めでたさの黄のふくよかに福寿草	安立 公彦
鳴 三月号	人日のポテトサラダを丸く盛る	高橋 道子



末黒野 三月号	日を浴びつ枯れ葉を散らす大櫛 極月の流離ごころや港の灯	小川 玉泉 松本三千夫
やぶれ傘 94号	冬たんぼぼ空地に砂利の積まれゆく	大崎 紀夫
雲の峰 三月号	一日日とて同じ雲無く寒明けぬ	朝妻 力
萱 三月号	春めけるひと日や鮎の試し釣り なる程のふくら雀のふくれやう	木村 嘉男 亀田虎童子
霽 三月号	霞ヶ浦産蓮根の括れやう	小島 良子
祝『いま、兜太は』	緋緘鎧の兜太見参空つ風 径五尺の赤檜は慈父初詣	松林 尚志 藤田 宏
集 63号	夢を見て覚めて冬空の星曼茶羅	大山 夏子
こだま 二月号	春埃払ふ青春活気の書	松林 尚志
燭	皇居にて雅楽参観二句 管絃は波濤のひびき松の花	瀧 春一
オリンピック東京の空雁渡る		(喜孝)



### 赤座典子

薄氷の縁を鶴鶴ちよんちよんと  
越後路のスーパーにはや春キャベツ  
淡雪の見る見る変る牡丹雪  
信玄の女の墓に草青む  
白梅の大樹ふんはり万度かな

### 薄氷の縁を鶴鶴ちよんちよんと

今までもたびたび言ってきましたが、普通の文章、散文といっても宜しいのですが、そういう語順で句歌を作るのは俳句を平凡にします。出来あがった句を、一歩立ち止って見直してみてください。「鶴鶴が縁をちよんちよんす氷」。

### 越後路のスーパーにはや春キャベツ

「スーパー」とか「コンビニ」の語を俳句に遣う、余程上手に据えないと俳句になり難い。「店頭にはや春キャベツ越後の旅」。

### 淡雪の見る見る変る牡丹雪

越後湯沢で、小さな雪の粒がみるまに大きな牡丹雪になつて感動しました、と仰有つていらしゃいます。地上で気温が零下の時粉雪になり、気温が高ければ牡丹雪になります、気象学では暖地の雪は雪片が数個から数百個くつきあつて一粒の雪として降る、ですからその団子状の雪片は時には直径10cmになることもあるそうで、典子さんの御覧になつたのはそういう時の雪に違いありません。小粒の雪が降る途中からみあつて大きな雪片になる。その時間が「みるみる」なのですが、「ぐいぐい」とか「ずんずん」、「みるみる」等は俳句では修辭が難しい。「ふり出してやがて大粒春の雪」。因みに「牡丹雪」は、歳時記により春季としたり冬としたり。初冬では殆んどが牡丹雪になりますし、立春以後でも粉雪になることもある。

## 信玄の女の墓に草青む

めりはりをつけたい。「信玄に女の墓や草青む」。

## 白梅の大樹ふんはり万度かな

仮にこれが「ふつくり」とあつたら梅一輪だけの形容。「ふんはり」ですから梅の大樹全体が見えてくる。取りあわせの「万度かな」が飛躍しているがら据わっています。万燈の明り。

須賀敏子

やはらかき光あつめて犬ふぐり  
新しき鳥居くぐれば梅香る  
頷けば同期の集ひうららけし  
地図帳と季寄せ鉛筆春炬燵  
遠く来てニースの市場ミモザ咲く

## やはらかき光あつめて犬ふぐり

「光あつめる」なら犬のふぐりがあつめることに。「光あつまる」なら光そのものが集まることに。敏子さんが「あつめて」と置いたわけですから、それに従うことに。

新しき鳥居くぐれば梅香る

「鳥居」とあれば大概「くぐる」と。平凡を離れたい。「大きな鳥居建ちけり梅香る」。

## 頷けば同期の集ひうららけし

「頷く」がやや意味不明。「同期の集ひ」が成句に近い。どうせなら成句そのものを遣って「同気あひ求めて酌めるうららけし」敏子さんの意を離れることになりました。

## 地図帳と季寄せ鉛筆春炬燵

中七までの措辞かち何処かへ吟行かな、と思っていたら坐五で予想が外れた。「地図帳と季寄せとそして春炬燵」。

## 遠く来てニースの市場ミモザ咲く

遙々来たことを主語に置くべき。「ミモザ咲くニースの市場遠く来し」。

長崎桂子

空は青止む間の樹水のトンネル  
白に影氷瀑に合ふ自然かな

夕茜 鈴鹿峰 染め春近し  
春を待つ歩道工事の掲示板

## 空は青止む間の樹水のトンネル

「青が止む間」なんででしょうか。やや言葉遣いが怪しい。「空青き時の樹水のトンネル」。破調が面白い。

## 白に影氷瀑に合ふ自然かな

「白に影」は無理筋。坐五の「自然かな」を可とするか不可とすべきか。私は可とします。「影白き氷瀑に合ふ自然かな」。

## 春を待つ歩道工事の掲示板

物だけを据えて説明しない。佳句。

## 春に入る電柱工事の作業服

前の句に似てますね。こんな時は目先を変えるのです。「作業服は電柱工事春に入る」。

七郎衛門吉保

凧上げの親子三代風をみる  
ひのき香のアロマライトや冴返る  
紅白の梅徘徊る兄と妹  
採餌台慣れそで慣れぬ冬の鳥  
風信子グーチョキパーの葉に光

## 凧上げの親子三代風をみる

俳句は具体的が宜しい、とは昔から言われること。「凧上げの祖父と父と子風をみる」。

## ひのき香のアロマライトや冴返る

「香」に直接名討が付くことは本来的でないのですが、俳句には時々あります。定型を守りたいためでしょうか。「花香」「梅香」とはあまり言わない。「ひのきの香アロマライトや冴返る」。

## 紅白の梅徘徊る兄と妹

坐五「兄と妹」は「あにといも」と読むんでしょうか。「兄と妹」の「いも」とを「いも」と読ませて「兄」の語と並べるのは少し違うのでは、と私は感ずるのです。「紅

白の梅徘徊る兄いもうと」。

### 探餌台慣れそで慣れぬ冬の鳥

句では、「慣れそで慣れぬ」まで言うのは言い過ぎなのです。余裕余音があるべき。「探餌台慣れずて冬の鳥なりけり」。

### 風信子グーチヨキパーの葉に光

あの肉質線形の葉身をジャンケンの手の形に宛てたのでしょうか。光があたつて。

### 大日向幸江

一日を米一合之目刺しかな  
深眠り青谷古墳に春の雪  
体当り鳥取砂丘に春波頭  
山陰や傘傘かさの春なりし  
ちりちりと小さき音立て雪の降る

### 一日を米一合之目刺しかな

中七坐五で充分俳句になってます。「日を過ぐす米一

合と目刺しかな」。

### 深眠り青谷古墳に春の雪

「深眠り」の語を遣うのなら思い切つて主役に据うべき。「春雪の青谷古墳の深眠り」。但し、「深眠り」の措辞を嫌う先生が必ずある筈ではありませんが。

### 体当り鳥取砂丘に春波頭

「体当り」がやつぱり悪い擬人化。「春の波鳥取砂丘に行き当る」。

### 山陰や傘傘かさの春なりし

「傘」をくり返して、さほど効果があるとは思えません。「山陰や黒傘ばかり春の昼。中七に嘘があるわけですが、「山陰」と「黒傘」に響くところがありそうだ、と。

### ちりちりと小さき音立て雪の降る

この雪を私は「粉雪」ととり、佳句だ、と。「ちりちりと小さき音せり粉雪降る」。

### 秋川 泉

迷い込む空中庭園冬の薔薇  
花巫女のしづしづ進む針供養  
日溜りにひっそりと咲き木瓜の花  
春一番藪に逃げ込む猫二匹  
初午の供物の鯛や輝けり

### 迷い込む空中庭園冬の薔薇

「空中庭園」に今ひとつ現実感が湧かないのです。外してしまった方がむしろいい。「迷い込む庭園の冬薔薇かな」。

### 花巫女のしづしづ進む針供養

泉さん、「しづしづ」を「しづく」としたいのだが、と仰有つていらつしやる。そう書いても良いのだろうか、と。勿論大いに結構。踊り字であろうと旧かなであろうと、現在は何を遣つてもいいことになってます。新かなを遣いなさい、常用漢字を遣うべし、等は「目安」「よりどころ」としてであつて、文芸では文法の誤り以外は何を遣つてもいい。ただ、新聞などで分るように踊り字は現在、漢字一字のくり返しに使用する「々」(同の字点)

の他は殆んど遣われぬ。そして先に言った通り文芸では泉さんが遣いたいと仰有る「く」(くの字点)は同の字点の次によく遣われるます。大いに用いるべし。「花巫女のしづくと針供養かな」。

### 日溜りにひっそりと咲き木瓜の花

散文の語序です。「日溜りにひっそり木瓜の花が咲く」。

### 春一番藪に逃げ込む猫二匹

猫の「二匹」に意味があるのでしょうか。坐五に置くことで言葉が重くなつてしまうのです。「猫二匹藪に逃げ込み春一番」。あり来たり「春一番」と置くより一つ外した方が面白くなる。

### 初午の供物の鯛や輝けり

供物の鯛が輝いた、この上なく平凡な措辞なのですが、中七で句切つて「輝けり」を据えた、形の直しさが句を上等にすることもあります。

### 田中藤穂

午后の陽のとどき薄氷ゆれはじむ

金星や篝火草は燃えつきし  
春寒き両国海鮮丼豪華  
建売の小家春灯点りたる  
暗殺の今もある世に春一番

### 午后の陽のとどき薄氷ゆれはじむ

目がとどいて氷が溶け揺れ始める、とまでは言わない  
ほうが余韻が出ます。「薄氷に午后の太陽今とどく」。

### 金星や篝火草は燃えつきし

花に疎い私がかつて、シクラメンのことでしょう、と  
娘に指摘されたことがあって、いよいよ花の句を作れな  
くなったことがあります。掲句。「金星や」がうまい。  
但し、「篝火草は」。俳句の先生には「は」の使用を嫌う  
かたがいて、「は」を遣った句稿が廻ってくる。人の句  
ながらどきどきしたものでした。句が重くなる、という  
ことらしい。で、その先生自身どうして重くなるか、説  
明したことがない。

### 春寒き両国海鮮丼豪華

掲句ですと「春寒き両国」のところで間があるわけ  
ですが、「春寒く両国海鮮丼豪華」と置いた方がめりはり  
が得ます。

### 建売の小家春灯点りたる

「建売の小家」と言わないほうがいいと。豪華な建売  
も確かにありますが、大凡は小家。「建売の家の春灯点  
りたる」。

### 暗殺の今もある世に春一番

「今もある世に」が説明っぽい。「暗殺といふこと今も  
春一番」。

石森理和

枯木立まだまだ寝むり深そうな  
葉ざくらやをさなはすつかり乳離れ  
やはらかそう食べてみたいな春の雲  
春の雲ふわりと離れゆるり消ゆ

### 枯木立まだまだ寝むり深そうな

「枯木立」を「ねむっている」と形容するのは凡。「こ  
の木立芽吹まだまだ遠そうな」。

### 葉ざくらやをさなはすつかり乳離れ

「すつかり」の措辞が生きていないと思う。「をさなき  
の乳離れせる花は葉に」。

佐藤喜孝

白梅や光はけふも新しく  
人がゐる持ち上げでゐるしだれ梅  
春浅し居つきし猫と歳をとる

### 白梅や光はけふも新しく

桜は積極的な花だが、梅は受け入れるばかりの花で  
ある、というような文章をむかし書いたことがあります  
た。消極的であるからこそ梅の花の咲いているあいだは  
光も日々新しい。白梅、即光、なのです。

### 人がゐる持ち上げでゐるしだれ梅

枝垂木は神霊の依代とみなすことがあったため、怪異

伝承等に結びついた話が伝わっているようです。特に松  
類に多い。そして「しだれ梅」。怪異伝承に係るのは梅  
も同様でしょう。人が居る、怪異に係わるしだれ梅があ  
る、そんな梅の枝をその人が持ち上げている。怪談ば夏  
だけではない。

### 春浅し居つきし猫と歳をとる

喜孝代表との約束です、来月投句分で「はしたて集」  
を終了致します。  
長々おつきあい頂きました。句作りはむずかしく考え  
る必要ないと思いま  
すが考えなかつたら句にならない、結局死ぬまで勉強、  
ということでしょうか。有難うございました。



トタン

時雨るるや鋳物工場のトタン屋根  
滝茶屋に光る緑のトタン屋根  
初雀としていつものトタン屋根

篠田 純子  
栢森 定男  
定梶じよう

戸棚

初雪や戸棚の奥のゴム長靴  
戸棚涼し古き大皿割りてより

芝宮須磨子  
篠田 純子

どた靴

雪催わがどた靴を磨きけり  
どた靴や詩を得んために青き踏み

芝 尚子  
定梶じよう

土地

土地に来て土地のもの買う夏休み  
豆腐好き土産は土地の新豆腐  
この土地の昔話や花七分  
土地よぎる単線電車いわし雲

東 亜 未  
赤座 典子  
芝宮須磨子  
早崎 泰江

途中

拭き掃除途中一息小豆洗ふ  
笛吹川旅の途中に草を摘む  
自転車の坂の途中や露の臺  
観覧車途中下車して夕焼なか  
籠枕羽化登仙の途中なり

東 亜 未  
芝宮須磨子  
齊藤 裕子  
佐藤 喜孝  
田中 藤穂

巡礼の途中のやうに酸葉嘔む  
秋風と道連になり途中まで

竹内 弘子  
長崎 桂子

ででむしの雲をめざせるその途中  
体温をもらふ途中の冬の蠅  
雪富士の見えしホームへ途中下車

定梶じよう  
吉弘 恭子  
須賀 敏子

都庁

東京都庁壊れぬものか広島忌

堀内 一郎

どちら

春の風めがねマスクでどちらさま  
霜に立つ父子の影のどちらが濃い  
あなたさまどちらに住まひ白緋  
内と外どちらもこはし浮袋

赤座 典子  
定梶じよう  
東 亜 未

真鴨みてどちらの顔も皆同じ  
どちらかと言へば熟柿の方が好き

秋川 喜孝  
須賀 敏子

嫁ぐ

鈴蘭の四五本咲けり嫁ぐ朝  
黒揚羽寺の娘寺へ嫁ぎけり  
九州の人に嫁ぎし子の雑煮  
秋茄子嫁ぎ受け継ぐ塩の壺  
二日灸嫁ぎて耐えよと祖母の指  
嫁ぐ子のやさしくなりぬ実紫

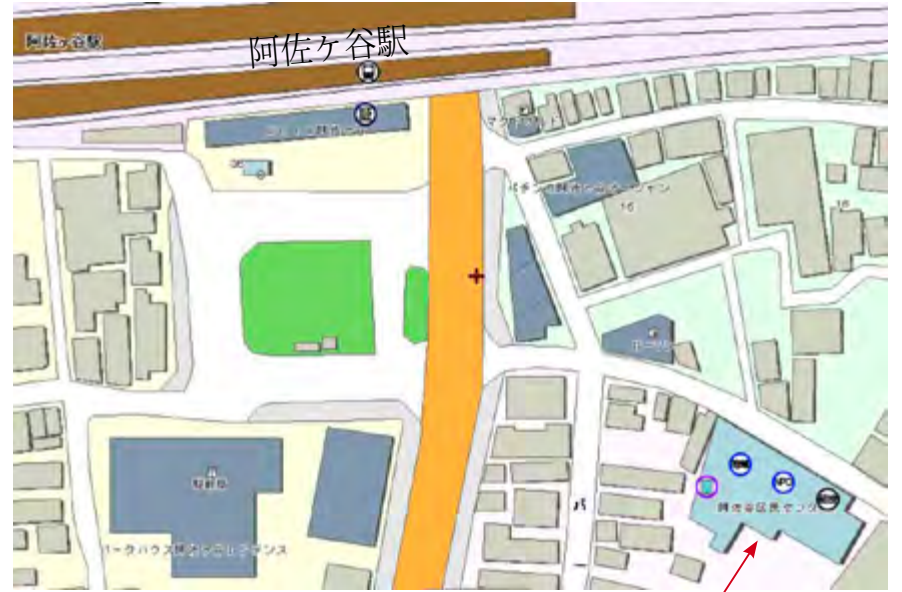
須賀 敏子  
後藤 志づ  
篠田 純子  
石森 理和  
藤野 寿子  
井上 石動

鮮人に俳諧殖えし子規忌な  
絲瓜忌や鮮人俳句に志す  
おのおのかたちづくれる瓢かな  
春聯や日清役の柱和六年  
桑舟の入りかはり着く飼屋かな  
親日と言はれて住めり花はち

暖かやかたまり出づる瓢苗昭和七年  
春雨や寝かめてかたき旅蒲團  
濯む女にものを落せる巢鳥かな  
草叢や露涼しさの丈瓢花岸 金玉孝 鳥瓢 一年余にして 七月八日遠に長途 各年三四才  
鮮人の俳句の忌日やほととぎす

上玉孝 虚子選の俳句  
夕景の鳥に見えぬ村父かな昭和七年  
よるべなき老人にして夜學かな  
花敷衣に月めかり居る時雨かな  
燈臺や二百十日のかり船  
聞きなれし瀧の響の障子かな  
コスモスの影ある月の障子かな  
負角力千草負うて去りに  
月の出平時は甘へ蔭と妻けり

遠砧燈下親しくなりけり  
案内僧紅苺のうすき申譯昭和八年  
春愁の長鼓を打てる姪生かな  
春愁や窓を開ればもとの山  
牡丹や鬼と言はれて富める家同行者五人を算す  
鮮人に俳句はやるなり月の秋



あとがき

創刊以来お世話になりました「傳句会」の会場が左記の五月より変更になります。毎月第一火曜一時に日付も変更になります。石森理和様には本当に長い間ありがとうございました。

阿佐谷地域区民センター

杉並区阿佐谷南一丁目47番17号

03-3314-7211

三階第二集会室

二〇一七年四月号

発行日	四月十日
発行所	東京都中野区中央2-50-3
電話	090-9828-4244
ファックス	03-3371-4623
印刷・製本・レイアウト	竹僊房
カット/松村美智子・ティリ エイマ	
表紙・佐藤喜孝	
会費	一〇〇〇〇円(送料共) / 一年
郵便振替	00130655526 (あを発行所)
	乱丁・落丁お取替えます。